



全道展交流紙

2019.3

No.57



生きることと、表現すること

時は昭和から平成、そして新元号に変わる今年。少子高齢化社会が及ぼすさまざまな課題は、公募展など文化活動にも波及しているのが実状だ。来年は創立75周年を迎える全道展。大きく変化する時代と表現者たち。
テーマへの思いを、絵画の木村富秋会員に寄稿してもらった。

「人生100年時代」と私

木村 富秋

全道展も今年で74歳。そうか、もう……そう云う事かと、時の流れの速さに得心がいき「ZEN」編集部依頼の、この少しばかり切り口の広いテーマを受けることとした。

節目、節目に記念展を絡むせいか5年・10年がまさにアッと云う間、私の中の時間軸は年々そのほとんどを省略・省略の繰り返しのように、どんどん加速してゆくように思えてしまう。とくに去年のような震度7の激震に驚かされ、思いもしない逆走する台風など自然の猛威を突き付けられると、「今までとは、何か違う」……そんな妄想に近い勝手な思いまでが、流れを更に加速させているように思えてくるのだ。

ここ数年、画家の回顧展を見る機会がめっきり少なくなったように思う。

「人生100年時代」と云われるようになった今。男女共に全体的な年齢の若返りがその一因にもなっているのだろうか？……ふとしたことで、私自身も年齢を否定なく自覚させられるこの頃だが、心に留め、ふと出掛けた回顧展でハートに響く作品に出会うと、やがて黄泉の世界に向かう画家の人生の一端を見せられた様で、「よ・か・っ・た！」と一瞬時間が止まったように、なぜか胸が熱くなることがある……なにかとても貴重ないい時間を戴いたような、又自分が絵描きでいて本当に良かったと思える一瞬なのだと思ってしまう。ここ2～3年で札幌市内の主要なギャラリーも時代の波のまさに直撃を受けるようにすっかり様変わりしてしまった感がある。かつて、競い合うように個展・グループ展が開かれ、いつの年も個人や仲間達がその仕事振りを積極的に発表し

自作を世に問うてきた。中でも特に、全道展は会員も会友・一般出品者も実に意欲的に自分の仕事を発表し続けて来たのである。是非これからもこうした流れ・伝統は受け継がれていって欲しいと切に思っている。そして、現存する市内の各ギャラリーも、こうした意欲的な作家達に、もっと根っこの部分でぜひ協力的であって欲しいと願うばかりだ。私自身作家＝個展はきわめて必然なことで自身の体力のつづく限り発表は継続して行こうと思っている。

この創造の世界。学歴・年齢に関係なく、この世界への出会い・入り口は人それぞれ、公募展との出会い・関わりもそれに近い。どこかで人が拘わり、その人の人生が動きだしてゆく。絵画に限らず自己表現の確立までにはとても長い歳月を要するものだが、人のものの考え方は生まれ育った風土も、時代の興味の变化も関わってくる。好き嫌いは仕方ないとして、見た目やスタイルだけではないその奥にある美の造形、美の普遍的世界を求めてゆきたいものだ。只この世界も全てに正解がないだけ、感覚や才能も必要だがやはり努力家にはかなわぬ世界のように思える。

どことなく閉塞感が漂い、苛酷な生存競争にさらされ何か生きづらさをも抱えた現代。未来が不透明で先の見えない時代だからこそ、貴重で贅沢な時間の流れのなかで安らぎや喜びを与えてくれるこの世界を大切にしたいものである。



全道展事務局各部長が交替、ニューリーダーの活躍に期待 スムーズな運営には一層の協力が不可欠^(任期 2018.9~2021.9)



改革へと繋がる糸口 を模索することが大事

次長（事業部長）
宮地 明人

3年前に庶務部長を退任してから休憩を挟み、また事務局で仕事をさせていただくことになりました。次長と事業部長を兼務いたします絵画部会員の宮地です。よろしくお願いいたします。

今の公募団体では様々な課題がありますが、どれを取ってもすぐに解決するものではありません。ただ、少しでも打開へと繋がるような改革をしていかなければなりません。公募展の未来をどのような姿にしていくなか考える時です。任期の3年間では、今抱えている課題が打開へと繋がるような糸口を見つけることを目標に努めたいと思います。今後とも会員をはじめ、会友、一般出品者、全道展関係者様にはご協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。



恩返しができる チャンス でも不安もいっぱい

庶務部長
會田 千夏

この度、庶務部の仕事を引き継ぐことになりました。役員の仕事を任されるなんてまだまだ先のことだと思っておりましたが、19歳で全道展に出品してから20年目、お世話になってきた会員の先生方へ恩返しができるチャンスだと思い、能力が無いながら任務を引き継がせていただきました。

きちんと任期を全うできるか不安ばかりですが、皆様のお力に頼りながら、できる限り仕事をこなしていきたいと思います。

どうぞ、よろしくお願い申し上げます。



精一杯 頑張るのみ

企画部長
川名 義美

今回企画部長になりました彫刻部の川名義美です。主に塑造と木彫をやっています。

前任の荏澤さんは、とても丁寧な仕事をされました。引き継いだUSBメモリーを見るとその苦勞がとてもよくわかります。前任者ほどの仕事ができるかどうかかわかりませんが、引き受けた以上精一杯行いたいと思います。

慣れない仕事で、皆様にはご迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、後輩を育てる視点で、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



7年ぶりの重責 会を盛り上げて 行けたら

会計部長
竹田 道代

退会された前任者から引継ぎ、会計を担うことになりました竹田道代です。7年ぶりに再登板となりますが、2年間田崎事務局長のもと、業務を進めたいと思います。

全道展は会員、会友の皆さんの年会費と、6月に開催される本展の収入（一般の出品料、入場料、図録販売、広告料など）で運営されています。運営は決して安泰ではありませんが、全道展に関わる方は積極的に参加していただき、全道展のファンを増やし、会を盛り上げて行けたらと思います。

全道展俯瞰図



函館ベル・エポック ～忘れ得ぬ人たち～

輪島 進一＝函館市

1、プチプチ・モンパルナス

戦後、写実主義は“くそリアリズム”として排斥され、抽象やアンフォルメルでなければ絵画にあらず、という風潮が美術界を席卷。その炎に全道展創立会員のみなならず、全道展第二世代の蛸子善悦や菅野充造らも染まった。やがてモダニズムの潮流が静まり、画家たちが独自のスタイルで個展活動を行っていた70年代中盤の函館・杉並町に絵描きのたまり場、「カフェ阿蘭陀館」が出来た。近くに画材店、文雅堂があり、その2階がギャラリーや絵画教室になっていて、市内の絵画関係者はよく利用した。箱根寿保初め函館の中堅の画家たちはそこで絵画教室も開いていた。店主も議論好きで、画材を買いに来た画家たちとよく芸術論を交わす雰囲気があった。時に議論の続きを、画家たちは近くに出来たばかりのこの阿蘭陀館で行うのを常とした。当時僕は札幌から戻って高校の非常勤講師をしていたが、ウイーンに絵画修行に出かけた木村訓丈の絵画教室も引き受けていた。箱根さんや僕は教室の終わった後も生徒たちを引き連れてそこへ行った。店主も芸術に造詣が深く理解を示していたから議論の続きをするには恰好の場。そのうちに次第に絵描きが集まりだし、たまり場となって行ったのだ。道内ではすでに名声を博し老境に達していた創立会員の岩船修三、橋本三郎、時々東京から戻る菅野充造、パリから里帰りする蛸子善悦、ウイーン帰りの木村訓丈、世界の各地に旅を繰り返していた箱根寿保たち全道展の精鋭たちからまだまだ端くれの僕らのような二十代の若手まで同じ場を共有したことの奇跡。さらに道新函館支社に転勤となった、道内一番の美術記者・竹岡和田男と画家の羊子ご夫婦初め道内の有名画家たちもよく顔を見せた。絵画関係者だけではない。地元の文学者、音楽家、自称詩人、得体の知れない旅芸人…。こういう人たちで賑わった。そうして次第にプチモンパルナス的雰囲気を呈していった。言わずもがな、パリのモンパルナスは、絵描きなら一度はあこがれた芸術の聖地。世界中から集まった金のない画家、彫刻家、小説家、詩人たちが安い家賃で暮らし、同じ志を持って制作に励んだ場所。権力と金からは無縁な存在である絵描きの解放区。

さて、函館の阿蘭陀館はそのような雰囲気を醸し出していた。当時はすでに日本はポストモダンのムードで、モンパルナス的画家集団は東京にも札幌にも消えうせていた。その時代になぜ函館の阿蘭陀館はモンパルナス的な雰囲気を保つことができたか。飲んだ後、皆が近場に住んでいたことも要因のひとつだろう。なにしろ夜明け



「函館・杉並町の阿蘭陀館に集った仲間たち」(1975年当時)

まで飲み明かせる場であった。その頃はすでに東京の画家たちは飲み会があって議論が沸騰しても、最終電車で帰らねばならない距離に住んでいた。

その阿蘭陀館の集団の中心に箱根寿保がいた。飲んべえの箱根さんは時に辻音楽士のように歌い、踊り出したり、ある時は飲んだくれて誰彼となく芸術論を仕掛けたり…。毎夜二時三時、ときには四時五時まで飲み会は続いたことも。絵描きは純粋に芸術を遂行する高邁な精神と同時に、ヤンチャで自由闊達な子供の心。この両方を兼ね備えるのが理想の絵描き、と僕は固く信じている。箱根さんはその象徴として魅力的な存在であった。

阿蘭陀館は数年で閉店。絵描きばかりが集まる怪しい異様な雰囲気を醸しだし一般の市民が来なくなり商売上がったりが原因。しかし渡りに船、美術好きのママの経営するカチューシャというロシア料理店が近くにできて、そこにまたみんなは集まり盛り上がった。しかしそこはつぶれなかった。酒癖の悪い絵描きは時々出入り禁止にもなったのだ。80年代、そのようにして函館の絵描きは次第に大人しくなっていた。

2、批評精神の存在

さてこの時期、画家を支える2つの要因が当時の函館にはあった。そのひとつ、批評精神の存在。画家を活気づけるにはとても大事な批評文化だ。当時タウン誌を発行し、函館の文化状況を発信続けていた木下順一。作家であり、道新文化賞等も受賞。彼は60年代後半から地元の画家たちの個展や全道展移動展をタウン誌上で熱心に批評していた。主立ったものでは岩船修三、橋本三郎、蛸子善悦、箱根寿保らの個展等。70年代中盤以降、美術の記事はさらに増えていく。画家のエッセーや画家たちの座談会、或いは若手画家への叱咤激励とも云える個展批評も誌上に多く掲載された。また新聞の存在も大きい。当時道新には美術専門の記者がいて地方版にも的確で充実した内容の記事が多く掲載されていた。

3、市民の支援活動

もうひとつの要因、それは芸術に対する市民の興味や関心の高さ。財界人や熱烈的な絵画愛好家、支援者は多かった。中心に関輝夫がいた。市の文化行政に精通し信望も厚かった彼は現存作家を対象にした絵の頒布会を行った。関さんの声がけで、一人の画家に対して三十名以上の購入希望者がすぐ集まった。分割して支払うならなんとか購入できるというサラリーマンの方もかなりいて、市民運動的な盛り上がりを見せた。(敬称略)

「岡沼淳一 木彫の世界 & 神田日勝と道東の画家たち展」

2018.9.15～12.2 北海道立帯広美術館



道立帯広美術館展示

岡沼氏工房展示

日勝峠を越える度に雄大な十勝平野に対峙するという感覚が立ち上がる。

会場の前半が「神田日勝と道東の画家たち展」後半が「岡沼淳一 木彫の世界展」という構成になっている。「神田日勝…展」は日勝作品を中心に、先駆者や日勝の同時代の画家たち（神田一明、岡沼英雄、齊藤隆博、渡邊禎祥、岸本裕躬、徳丸滋…等々、敬称略）が陳列されていた。

さて後半の「岡沼淳一…展」会場に入るなり、その空間の在り様に一瞬、魂が奪われるように見とれてしまった。「空間」とは勿論「作品群を包み込んだ全体」という意味である。直線、円形や波という形に加え、得も言われぬ色彩の魅力が一瞬にして私を包み込んだのだった。ここには私の彫刻の概念にはなかった色彩とグラデーションがある。私が引き込まれた要因の一つにこの絵画的な要素もあったからだろう。楡（ニレ）の埋もれ木の乳白色の肌の艶めき、浮かび上がる木目の美しさ、ライティングの妙、これらが総合的にその魅力を高めている。

午後2時からは岡沼淳一氏によるアーティスト・トーク「ニレの木に魅せられて—その半世紀を語る」を拝聴した。

学芸大函館分校での学生時代は、彫刻の先生よりもデザインの先生に、後バーバラ・ヘップワース（イギリスの彫刻家）やブランクシー等に影響を受けたこと。よく山登りをしたこと「自然」というものが体に沁みこんで、作品ににじみ出てくるらしいこと。楡の「埋もれ木」との出会いが氏にとって大きな意義があったことなどである……。

岡沼作品のテーマは北海道の山や川、特に十勝の自然に対するオマージュである。その成り立ちという造形性

に風や雲の流れ、風紋、波紋等の詩的感覚も加わってふくよかである。「楡の埋もれ木」は自然からの啓示であったかもしれない。

楡の埋もれ木は砂や石が噛んでいて、製材すると鋸刃が欠けやすく、製材職人には敬遠される。ようやく出会えた職人さんはその後、岡沼さんの仕事にほれ込んで長いお付き合いとなった。重量のある巨大な楡の彫刻を支える鉄の支柱や台座も溶接の職人さんが長年にわたって支えてきてくれた。彫刻の仕事がいかに大変かということである。ただ作品を創るだけではなく心から信頼できる職人さんなしにこれだけの仕事はなしえなかったということを岡沼さんは自負を持ちつつも大変謙虚に話されていた。

オープンの数日前から全道展彫刻部の会員の皆さんが岡沼さんをサポートするために泊まり込んでお手伝いをしたとのこと。岡沼さんを慕いサポートされた全道展彫刻部の仲間たちの姿を見ると、岡沼さんは確実に全道展彫刻部の歴史 本郷新、佐藤忠良、本田明二につながるDNAを引き継いでいると感じた。そしてそのDNAが若い世代の会員へも確実に伝わっているようである。

「こうして作品群を見渡すと、よくもこれほど作ってこれたものだと、自分ながら思う」という言葉が印象的だった。

追記：同館では別室で「絵具の国—抽象の試み—」展も開催されていた。浅川茂、近藤みどり（敬称略）の作品もあり、その活躍が頼もしく感じられた。

（共同執筆：田崎謙一、梅津 薫）

ART STAGE

—作家の痕跡—

「西村徳清・福岡幸一・谷口一芳・7つの視点展」 それぞれの企画展から

深川市アートホール東洲館館長 渡辺 貞之

確かに過去という時間空間はあった。未来もあるだろう。しかし現在という時間空間はない。だから画家は現在を描きとどめようとする。それは、具体的な目の前の事物や出来事だったりする。奇しくも今回の作者たちからそれぞれの思考や技量でこの「現在」の表現を読み取ることができた。

・西村徳清絵画展 9月16日～30日

現実の経験や見聞を想念に結びつけて表現・提示する。観る者の脳裡にはそれをむしろ言い知れないリアルティとして思い抱く。感情のない近代的な建物や空間の中、人間は気配だけが残す。作者にとってそれは肯定なのか否定なのか。



西村徳清

・福岡幸一版画展 10月2日～14日

執拗に、かつ寡黙とも言える表現の繰り返し。その制作態度の中に、長い間、ひたすら追い求めるモダニズムに疑問を突きつけ、化石という深い年月の自然の織りなす造形性に美を見出す。それは行方を失いつつある現代芸術に対するアンチテーゼなのか。



福岡幸一

・谷口一芳回顧展 10月16日～31日

2013年、94歳で逝去された会員。ひたすら自然界の生業を見つめ、その想いをテーマにイメージを定着させた。特に森のふくろうに深い「愛」を見出し、人間の様相とダブルイメージさせ、表現している。



谷口一芳

・7つの視点展 12月1日～15日

札幌市東区に住む7人の女性全道展会員による展覧会。

阿南ゆう子(版画) 花という一般的な概念を捨て、独特の解釈で表現。そこには現代への批判性と肯定性の間を浮遊する屈折した意味合いがあるのか。



阿南ゆう子

関川敦子(版画) 一見パロディックな表現が確かな技倆で単なるロマンチズムを超えたさまざまなことを想起させる。



関川敦子

小野寺紀子(彫刻) オーソドックスな人物をモチーフにした作品。確実な造形性。全体にノスタルジックな清涼感を感じる。

黒木孝子(絵画) 具象による雄弁な語りの時代は終わった……と言われる。静かな前衛、ブルーを基調にした寡黙な作品は作家の精神なのだろう。



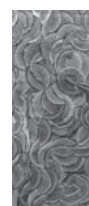
黒木孝子

米澤邦子(絵画) 使い捨てられるべきものを画材として見直す視点。それらを体系的構成で創りあげる豊かな創造のセンスが見える。

富田知子(絵画) 時間と空間は芸術の原理であるとともに、作品の基本構造でもある。一種宗教的な雰囲気の中に自己と世界の関係を模索しているのではないか。



富田知子



米澤邦子

三好美和子(工芸) 織りという表現素材を駆使し、時間・空間をダイナミックで野生的に空間表現。強い説得力を感じ取れる。



三好美和子



小野寺紀子

全道展 東西南北 地区だより 室蘭・帯広・道東（釧路・根室）

2018 年 全道展室蘭地区から

工藤善蔵会員が室蘭市文化連盟功労賞受賞
会員作家の展覧会も続く

室蘭地区事務局 矢元 政行

今年は本地区からの受賞者が多くうれしい報告ができます。全道展 73 回展は、室蘭地区から神原利樹さんが新会友に推薦と佳作賞、奨励賞に中澤文隆さんと中野美砂子さんが受賞、渡部八代子さんと苔米地舞さんが初入選となり、室蘭地区として大きな喜びとなりました。本展終了後の 7 月 6 日(金)には、祝賀会と出品者の交流懇親会を室蘭市内の居酒屋で 17 名の参加で行われました。年々参加者が少なくなり、今年度は 20 名以下になってしまいました。でも、受賞者のスピーチや参加者から作品についての話など、アットホームな雰囲気でお酒を飲みながら語り合い、中身の濃い充実した時間を過ごすことができました。その中で、総じて言うと室蘭の作家は、群雄割拠、自由で個性的で発想がユニークで魅力的であるということです。

毎年行っている全道展室蘭地区作家展ですが、8 月 8 日(木)から 12 日(日)まで 5 日間の会期で行いました。最終日には、全道展室蘭地区会員によるギャラリートークを行いましたが、残念なことに私は当日、用事があって参加することができませんでした。出品者が自身の制作意図を話し、それを受けて会員がコメントし、質問や意見などフリートーキングの形で行いました。

また、室蘭市民美術館の館長で全道展会員の工藤善蔵氏は、長年の室蘭市の美術文化の貢献に対して 11 月 3 日に室蘭市文化連盟功労賞を受賞されました。おめでとうございます。

今年も室蘭市民美術館では、全道展室蘭地区の会員作家の展覧会が続きました。3 月 13 日(火)～5 月 20 日(日)に「西村徳一展」～命の神秘～胞子が芽生え浮遊する不思議な空間～、7 月 24 日(火)～9 月 30 日(日)に「佐藤光雄展」～トルソの形～愚直に描いて 50 年～が開催されました。室蘭市民などに改めて全道展の室蘭地区作家の魅力が示されたような気がします。



搬入時に室蘭市民美術館前での集合写真

「二つの道東地区展を終えて」

釧路地区会事務局 森川ヒロシ

釧路展 会期 8 月 1 日(水)～8 月 5 日(日)
会場 釧路市生涯学習センター 1 階
(市民展示ホール)

根室展 会期 8 月 8 日(水)～8 月 12 日(日)
会場 根室市総合文化会館

釧路は港祭り、根室は金比羅神社の例大祭と、両展ともにカモメ鳴く街のにぎわいの中で行われた。先の釧路展では、会期を通して 713 名もの方々に観覧していただくことができた。

絵画で加藤三枝子さんが 3 度目の奨励賞、森藤綾子さんが初入選、彫刻の石橋周子さんも 3 度目の受賞（佳作賞 1、奨励賞 2）、斎藤真紘さんが 2 度目の出品でみごと奨励賞と充実ぶりは著しい。釧路展最終日には、作品の制作意図や制作上の苦悩など発表する交流会を初めて開催し、互いの理解を深めるとともに、大いなる刺激を交わすことができた。



陳列を終え、いよいよ明日からオープンする会場で

続けて開催された根室展では、新会友の宇佐美修一さんの作品 2 点が、釧路展に引き続き圧巻の迫力で会場を引き締めた。根室開催は今回展で 2 度目。根室市内はもとより、中標津、別海、西春別と広い地域から多くの方々に観覧していただいた。11 日(土)には田崎事務局長をお招きし、ギャラリートークが行われた。50 名を超える多くの方々が集まり、一点一点を丁寧に解説する事務局長のお話に聴き入り、大変有意義であり素敵な時間をともに過ごすことができた。「悩まない作家はいない。悩むからこそ制作し続けるのだ。」田崎事務局長の言葉が響き渡る。

根室展は、会期を通して 616 人、釧路展と合わせて 1,329 名もの方々に全道展の一端を観ていただき、知っていただく好機となった。

田崎事務局長の言われる通り、悩まぬ作家は一人もお

られぬと思う。

政治、経済、世界情勢の動向、災害、テロ、様々な事件事故に胸を痛めぬことはたえずない。

絵を描いているばかりではない。彫刻しているだけではない。たえず世の動きを見詰め真実とは何か、今を生きる自身や人間としての在り方、悲痛と呻きそして喜びという表裏一体のせめぎ合いを、制作を通して求め続ける中に、作品はおのずと生み出されてくるのだと思う。

道東ならではの作風と、エネルギーの更なる発達と充実を拡大していきたいと思っている。

第22回全道展十勝地区展報告

さらに充実した展覧会に

十勝地区会代表 齊藤 隆博

地区展は昨年8月2日～7日帯広市民ギャラリーで開催しました。搬入の日、駅上は猛暑です。涼しい地下のギャラリーへ降りると既に田崎謙一会員が来て居ました。今年は飾り付けから田崎謙一事務局長、渡辺貞之会員、懇親会から道新の若林直樹さんも加わり「会場はいいね、天井が高いのが良い！」等と居酒屋で大いに盛り上がりました。会場には26名の地区会員が各々本展出品作と他に一点を加えた46点(130号を含む)を展示しました。また、二人(田崎、渡辺会員)に地元記者へ熱く地区展を宣伝して頂き、翌日の写真記事は会期終了まで掲示致しました。合評会にも指導頂き自作に真剣に向き合う稀有な一時を持てました。第73回全道展では佐藤真康が八木賞、川橋雪弘(彫刻)、荒井千恵子(工芸)が奨励賞、梅津美香新会員、佐藤真康が新会友になり石丸尚史(絵画)が初入選で、各々一層努力したいと決意を新たにしています。ところで、昨年9月15日～12月2日帯広美術館で神田日勝と道東の画家&岡沼淳一木彫の世界展(同時工房展)が開催され、現地区会から常設展(企画)に浅川茂、近藤みどり、道東展に渡邊禎祥、齊藤隆博が出品し、70年代前後の懐かしい作品も壁面を飾りました。オープニングには田崎事務局長始め地元美術関係者、本展の彫刻会員等大勢が出席しました。特に岡沼淳一展では大作(22点)が光と影の空間を創り上げ好評を博しました。今年十勝地区展は8月1日～6日帯広市民ギャラリーで開催します。



田崎事務局長を交えて、十勝地区会員

二つの展覧会

本田明二展と大本靖展が語りかけるもの

編集部 米澤 邦子

ともに北海道を活動の拠点とし、北国ならではの表現の探求を続けてきた彫刻家の本田明二と版画家の大本靖、特に今年は本田明二没後30年の年である。会場の本郷新記念札幌彫刻美術館の入口の木彫刻「馬碑」を見て思わず「あ、懐しい」と声が出た。と同時に何か作品が以前より丸味を帯びた様に感じた。遠い記憶ではもっと尖った作だったように思っていたのだ。1967年の作品だ。展示数は50点、具象から抽象的な造形の作まで野性味のあるノミ跡の美しさ、また一方で大胆に簡略化したなかにも素朴さが凝縮されて深い余韻が残る作品の数々、今さらながら本田明二の風貌が思い出された。2018年11月2日(金)から2019年1月17日(木)まで開催された展覧会の期間中には本田明二の人柄や業績を振り返るイベントも行われた。



立像と観客が一体化したような会場

「大本靖の版画でたどる北海道四季の風景」と題した展覧会が2018年12月1日(土)から2019年1月20日(日)まで北海道立文学館特別展示室で開かれた。

北海道の自然の雄大なスケール感、多色刷の印象的な構図と深みのある色調、端正な佇まいから豊かな抒情性を感じ取った。木版画76点と小さな蔵書票52点には1点の弛みがない。作品を前に唸った。抽象絵画や琳派などを学びデフォルメや装飾性も取り入れた大本靖の世界に加え、作品の取材地にちなんだ小説など文学作品も紹介、厚みと奥行きのある内容の展覧会であった。



珠玉の作品にジッと見入る人達

2019 年 第 74 回全道展作品募集

- 会 期 2019 年 6 月 12 日(水)～ 6 月 23 日(日)
- 会 場 札幌市民ギャラリー (中央区南 2 東 6)
10:00～18:00 (最終日 16:30) 月曜休館
- 部 門 絵画・版画・彫刻・工芸
- 搬 入 6 月 4 日(火)・ 6 月 5 日(水) 10:00～17:00
- 審 査 6 月 6 日(木)・ 6 月 7 日(金)
- 賞 全道美術協会賞・北海道新聞社賞・八木賞・佳作賞・奨励賞
- 出品料 3 点まで 8000 円、1 点追加ごとに 1000 円
23 歳以下の出品料半額(1996 年 4 月 2 日以降に生まれた方)
- 観覧料 当日券 800 円、前売券 600 円、23 歳以下・障がい者無料



2018 年の第 2 展示室光景

歴史を重ね 第 60 回 学生美術全道展開催

2018 年 10 月 6 日(土)～10 月 9 日(火)

大学生、高校生の若い感性の表現を発表する場、学生美術全道展には応募総数 146 点があり、このうち入賞、入選 142 点が札幌市民ギャラリーに展示された。

最高賞の橋本幸奈さん(おといねっふ美術工芸高等学校 2 年)は丁寧に対象を捉えた描画レベルの高い作品。ゆったりとした会場には学生らしい作品が並んだ。

7 日の表彰式には渡辺貞之審査委員長の講評の後、片岸法恵会員(工芸)のミニ講座があり、制作秘話と織りの真結びを実演した。講師の手ほどきで 60 名程の参加者も初挑戦し、「結び」の技を和やかに楽しんでいった。



できた！の表情の学生たち



田崎事務局長から賞状を授与される橋本幸奈さん

第 8 回新鋭展 更なる展開を

2018 年 11 月 20 日(火)～11 月 25 日(日)

大通美術館では 3 回目となる新鋭展が開かれた。第 73 回全道展入賞者と会友選抜者 19 名による展覧会には本展とは別の新作、32 点が並び中には遠く愛知県からの出品者の作品も。初日に行なわれたオープニングパーティで田崎事務局長からは「失敗を恐れずチャレンジ精神をもって制作してほしい」と激励のコメントがあった。出品者それぞれの思いが込められた作品だけに、出席した会員のアドバイスには皆、熱心に耳を傾け聞き入っていた。



新鋭展を次のステップに

全道展ぶろぐ

広報手段として 2011 年のホームページを始め、ぶろぐ、Facebook を開設。随時会員・会友の展覧会情報を発信中。どうぞ活用して下さい。

全道展 充実のホームページ

会員、会友の個展やグループ展情報を常に更新！

全道美術協会

検索 🔍

<http://www.zendouten.jp>

編集後記

人生は 100 年の時代という。長寿化を明るく意欲的に、豊かで楽しいものにするための情報も豊富だ。全道展創立会員の活動期(壮年期)当時には、おそらく描けなかった将来図であったろう。自然災害に明け暮れた昨年、今年が平穏であるようにと願うばかりだ。時代も人も変化する。私達ひとりひとりの「全道展」を初心に返って思い起こしてみたい。(2019.1 米澤記)

〈川本(ヤ)・澁谷・(文責)米澤〉